（資料3）

『ペルジネッテ』
—フリートリッヒ・シュルツによる第二のドイツ語訳および改訂版（1790）—

訳 小 川 保 博*

Zweite deutsche Übersetzung und Bearbeitung von Friedr. Schulz (1790)

OGAWA Yasuhiro

愛し合っている若者二人が，彼らの恋のためにおばをはじめとする親類のひとたちにいろいろ苦労させられた末に，ようやく夫婦になりました．彼らはとても満足し，子供のようにともに暮らしていました．若い妻が懐妊している，とわかったときにはよりいっそう満たされた気持ちに彼らはなりました．彼女がかわいいあとつぎが欲しいと常々思っていたからです．これで，と彼女は思いました，あとつぎがきっと生まれないではすまないであろう．

彼らから遠くないところに妖精がひとり住んでいて，妖精の気持ちすべてが美しい庭，そして美しい花々，草木，植物からはなれることはありませんでした．妖精は植え込んで庭をつくっていましたが，そこには世にも珍しいものがいくつも見られ，なかでも野ぢしゃ［Rapunzel］が当時まだとても珍しいものでした．妖精はそれを海を越えて持ってこさせていたのですが，国じゅうで野ぢしゃが見つけられるのはこの妖精の庭だけでした．

ところで，若い妻は野ぢしゃが食べたくて，食べたくてしょうがありませんでしたが，例の庭にはだれも入るのが許されてなかったので，それを手に入れることはとても難しいであろう，と彼女にはよく分かっていたので，彼女は深く悲しみ，とてもやつれてしまい，夫でさえもが彼女のことがほとんど見分けられないほどでした．いったいどうしてそんなに悲しみにくれているのか，と夫が彼女にひたすらたずねるので，彼女は言うのを長く控えていたのですが，野ぢしゃサラダが食べたいのです，とようやく彼女は夫に告白しました．夫はおおいにため息をつき，彼女が感じている食欲を満たすことがとても困難であるのをとても残念に思いましたが，彼はしかし彼女をとても愛していたし，また，愛はすべてを克服するものなので，日夜妖精の庭のまわりを歩き回り，塀を乗り越えようと彼はしましたが，塀はとても高かったので，そういうわけにはゆきませんでした．

とうとうある晩のこと，彼は庭の扉が開いているのを目にしました．彼はそっとしのび込み，とても運がよいことに，捕えられることなく，片手いっぱいに野ぢしゃを堀り取ることができ，急いで走り去り，妻にそれら野ぢしゃをもってきて手渡し，妻はそれでサラダをつくり，それをすっかりむさぼるように平らげました．それがとても彼女にはおいしかったので，あくる日にはそれを食べたい

* 工学部言語教育センター 准教授
2007年9月27日受付

気持ちが前より三倍も強くなったほどでした．なかなかどうして実際また野ぢしゃは当時とてもおいしかったのです．気の毒な夫はふたたび庭に行きましたが，連続三日間というものどうにもなりませんでした．妻はまたやつれました．とうとう彼は庭がまた開いているのを見つけ，入って行きました．ところが気がついたらあの妖精が彼の前にいて，彼に尋ねたのです：あつかましくも庭に入ってくるとはどういうことなのか．だれも入ってはならぬことは分かっていたであろうに．彼はとても驚き，妖精の前にひざまずきました．このたびだけはどうか何もしないで下さい，と彼は言い始めました．ここにいるのは自分のせいではないのです．ところが妻が小さな手いっぱいの野ぢしゃをもし食べさせてもらえなければ，彼女は死にたく思ってしまうだろう．彼女は妊娠しているのです，で自分のことがよく分かっているのでしょう—

分かった，と妖精は微笑みながら寛大に言いました：お前たちには欲しいだけ野ぢしゃをやることにしよう，お前らの妻がこれから産むであろう子供を私によこすならばな．

夫はしばらく考え，そしてそれから妖精にそれを約束しました．そこで彼は欲しいだけたくさんの野ぢしゃを手にすることができました．妻はそのためこれまで以上に彼を好きになりました．

彼女が子を産むときになったとき，あの妖精がお産の場にあらわれました．生まれてきたのは女の子で，妖精はその子を*ラプンツェル*と名づけました．妖精はその子を金銀の布にくるみ，筒に入れてあった貴重な水をその子にまくと，その子はこの世で一番美しい子供になりました．妖精はその子を家に連れて帰り，とても大事に養育させ，その子は12歳になる前にまさしく奇跡のようになりました．ところが，不幸の星がひとつ，その子の出産のときに輝いていたことが妖精には分かっていたので，その子を守るためにあらゆることをする決心を妖精はしていました．

妖精は森のまっただ中に魔法で高い銀の塔を出現させ，その塔には入ってゆけるような扉はまったくありませんでしたが，その代わりに，ずっと上のほうに小さな窓がひとつだけありました．それでもしかしその中の部屋という部屋が太陽に射し照らされているかのように明るかったのは，紅玉がとりつけられていて，あらゆるものを明るく照らしていたからです．若いラプンツェルには，何不自由なくぜいたくに暮らしたいと思えば必要とされるすべてが手に入りました．きらびやかなものばかり！箱やたんすを開けさえすれば，指輪，ダイヤ，真珠を彼女は手にでき，衣装だなという衣裳だながあふれるばかりにいっぱいになっていたので，ロシアの女帝でさえもがそこから衣裳を身につけるのを恥じなかったでしょう．すべてのものが最新の流行にかなっていました．彼女はここにまったくひとりでいて，それゆえ彼女にかけているのは交際でした．もし仮にそれが彼女にあったとすれば，彼女には何一つ欠けるものはなかったでしょう．

彼女が食べるものといえば煮たり焼いたりしたもの，マルチパン，アーモンドそして砂糖菓子であり，それはとてもおいしいもので，彼女も好んで食べました．

彼女が知っているのは妖精だけでしたので，ほかの誰をもそれに知りたいとは彼女は望まず，まったく申し分なくときを過ごしていました．読書をしたり，絵を描いたり，何かをかなでたり，刺しゅうや編み物をしたり，ようするに，しつけのよい娘ならするのが常であるようなすべてをしました．

彼女の住む部屋のたった一つの窓から見わたせる眺めはすばらしいものでした．それというのも，一方の側にはまぎれもない海が，他方の側にはうっそうと黒い森が見え，ともにとても美しく見えたからです．ラプンツェルの声はすばらしく，

彼女は歌うのが好きでした，とくに妖精が来るであろうと分かったときには．妖精はじつにしばしばやって来て，そして塔の下に立ったときにはいつも言いました：*ラプンツェル，お前の髪を下ろしなさい，私がのぼってゆけるようにな．*

ラプンツェルの髪は彼女の美しいものすべてをしのぐものでした．髪は30エレの長さがありましたが，支えるのが彼女にはつらくありませんでした．髪はブロンドで，純金のようで，お下げ髪に編まれ，美しいリボンが結ばれていました．さてそこで，妖精の声を耳にすると，彼女はいつもまずお下げ髪を窓の鉤に巻きつけ，下におろすのでした，妖精がのぼってこれるようにするために．

ラプンツェルがあるときひとり窓辺に立ったとき，彼女はすばらしく美しく歌い始めました．ある若い公子がちょうどそのとき狩りに出ていて，歌を耳にすると，ぬき足さし足で近づいてゆき，美しいラプンツェルを目にしました．彼には彼女がまるで天使のように美しく思え，彼は彼女にほれ込んでしまいました．彼はおそらく10回も塔のまわりをぐるぐると歩いたのですが，そこにはしかし扉が見つからなかったので深く悲しみ，ほとんど死にそうでありました．

いっぽうラプンツェルもまた，そのような美しい若者を見たとき，まったくわれを失いました．彼女は彼をしばらくじっと見つめ，とても驚きましたが，しかし急に窓から走り去り，それをぱたんと閉め，ひょっとするとあれが怪物であるのかもしれない，と彼女は思いました．それというのも，目で殺すことができる怪物どもがいる，と話に聞かされていたことがあったからで，また，彼のまなざしで気分がよくなくなってしまっているのに彼女は気がついていたからでした．

彼女がそのように急に姿を消すのを目にしたとき，公子はいまにも消え入りたいと思いました．彼はすぐ近くの炭焼き人の小屋で，いったいあの塔はどういうものなんだろうか，と尋ねると，あれはある妖精が建てさせたもので，そこにひとりの美しくて若い乙女を閉じ込めてしまった，と彼は聞かされました．そのように言われると，彼はよりいっそう好奇心がそそられ，毎日やって来ては，その塔のまわりをぐるぐるとしのび歩くのでした．あるとき塔の前に妖精がいるのを目にし，*ラプンツェル，お前の髪を下ろしなさい，私がのぼってゆけるようにな，*とその妖精が言うのを彼は耳にしました．すぐさま彼は気づいたのですが，あの美しい乙女が長いお下げ髪を下ろし，妖精がそれをつたってのぼってゆきました．彼はひとを訪れるこのような変わったやり方に驚きましたが，しかしそれをしっかりと肝に銘じて忘れませんでした．

明くる日，妖精がやってくるのが常であったときが過ぎ去った，と彼は思い，日が暮れるのをじっと待ち，夜がおとづれると窓の下にゆき，妖精の声をまねて，そして裏声で，*ラプンツェル，お前の髪を下ろしなさい，私がのぼってゆけるようにな，*と彼は言いました．

あわれなラプンツェルはなにも疑わず，窓辺にゆき，お下げ髪を下ろしました．公子はそれを伝ってのぼってゆき，上に到り，窓辺に立ったとき，また落ちてはしまうのではないだろうか，と思いましたが，じっさいそれほどにラプンツェルは美しかったのですが，しかし彼は勇気をふるいおこし，それは公子としての彼には難しいことではなく，部屋に飛び込み，ラプンツェルの足もとにひれ伏し，彼女の膝に腕をまわし，そうしながら彼女にいろいろなことを言い，彼女はそれらのことを信じることができました．しかしそれでも彼女はこわくて，ひどくあわれに声を上げ，じっさいまたようやくやめたのは，公子が彼女にほれたと同じくらいに彼にほれてしまったときで，そうしてようやく彼女は静かになりました．彼は彼女にすてきなことをとてもたくさん言い，彼女はもっぱらうろたえるばかりで答えませんでした．それ

が彼によい希望を抱かせ，とうとう彼は大胆になって，結婚することを申し出，すぐに彼女を妻にしようとしました．彼女はなにかもわからずにええと言い，どうなっているのかも分からずにことが起き，どこか分からないけれども彼女は快かったり痛かったりしました．それはとても礼儀正しいものでした！

公子は心から満たされました．ラプンツェルも彼を愛していることに慣れ，彼ら二人は毎日お互いに会いました．ところがほどなく，どのドレスも彼女にもはや合わなくなりました．よいことはなにも生じないであろう，と公子は気づきましたが，しかし彼女が深く悲しまないようにするため，彼女にはなにも言おうとは思いませんでした．ところが妖精がふたたびやって来て，ドレスがどれもあまりにきつくなっています，とラプンツェルが妖精に言ったとき，妖精は目が開かれるような思いがして言いました：*お前は何と運の悪い子だ，お前は大きな誤りをしてしまったのだ，そのために必ず罰せられねばならない．運命をまぬかれることはできないし，私のすべての用心が何の役にも立たなかったというわけだ．* こう言うと妖精は，なにもかも告白するようにと彼女に額にしわを寄せながら命じ，かわいそうなラプンツェルは言われたとうりにし，あわれにすすり泣きながら告白しました．

妖精はなんら心動かされませんでしたが，ラプンツェルはそれにもかかわらず，どのようにして愛するようになったのか，また，どのように愛されているのか，などと心打つことどもを妖精に話しました．妖精は，*ますますよくない！*，とたえず大きな声で言い，ラプンツェルのお下げ髪を手に巻き，ばさっと切り落とし，切った髪を窓にしっかり留め，それを伝ってラプンツェルを先に，つづいて妖精も下におりました．二人が下にいたると，妖精はラプンツェルとともにひとつの雲に身をくるみ，この雲が二人を連れて海辺に運んでゆき，そこで人里はなれていたが美しい地に彼女たちをおろしました．そこには草地，雑木林，澄んだ泉と小川があり，ツルニチ草でできた小さな小屋が一軒あり，そのなかには枯れ葉でできた敷きわらがひとつあり，その横にはとても珍しいビスケットの入ったかごがあり，そのビスケットは尽きることは決してありませんでした．ここに妖精はあわれなラプンツェルをひとり残し，もう一度かなり叱りとばしましたが，それがラプンツェルには，彼女にふりかかった他のことすべてにまして，とてもつらいものでした．

ここで彼女はかわいい公子と公女をひとりずつ産み，そしてこの地でこの二人の幼子に乳を飲ませ，この子たちの父がいないことに涙することがしばしばでありました．

ところが妖精には母親を罰したことで十分ではなく，父親にもしかるべき罰を受けさせることになりました．妖精は公子を意のままにすることがどうしても必要でした．彼女はラプンツェルのところを後にして帰ってくると，塔にのぼり，ラプンツェルがいつも歌っていたように歌い始めました．公子がやって来て，あれは彼女だ，と思いました．彼は大きな声で言いました：*ラプンツェル，お前の髪を下ろしなさい，私がのぼってゆけるようにな．* ところでラプンツェルの髪を妖精はまさにこのことのために切り取っておいたのでした．妖精はそこでお下げ髪をおろし，公子が登ってきました．公子はラプンツェルが見えないのに悲しい気持ちになり，切々と視線を走らせて彼女を探しましたが，しかし妖精が彼を怒って見つめながら言いました：*お前はなんと向こう見ずな奴なんだ，お前はひどい過ちを犯したのであり，そのために厳しく罰せられないではすまさせないぞ！* しかし彼は妖精の脅しに耳を貸さず，手をもみあわせながら走り回り，叫びに叫びました：*彼女はどこにいるのか，どこにいるのか，彼女は？—お前にとってはいないものになってしまっているのだ！* と妖精は言いました．すると公子は深い悲しみのあまり塔から飛び降り，普通であればいとも容易

に首の骨を折ることがありえたでありましょうが，彼の落下は幸運なもので，両目を失っただけでした．

もはや見ることができなくなったことにとても驚き，彼はしばらく塔のところで泣きながら横になり，口に出して言うのは*ラプンツェル，ラプンツェル！*だけでした．ようやく立ち上がり，とても長く苦労し手さぐりで歩き続けた末に，彼はよりよく歩くのが身につきました．そのようにして，ああ，どれくらい長くか分かりませんが，彼は歩き続け，その間に導いてくれるようなひとを見つけることはできませんでした．お腹がすけば草や茎を彼は食べました．それにはまったく慣れることが彼はできませんでした．

何年かしたあるとき，失われたラプンツェルのこと，そしてわが身の不幸への思いがとても強く心に戻ってきました．彼はある木の下に横になり，悲しい考えにすっかりひたっておりました．ところが突然彼は眠りから目が醒めたかのようにして美しい声を耳にしたのですが，その声は彼から遠く離れたところからではありえませんでした．それは彼の心に深くしみ入り，彼がもう久しく抱かなくなっていた感情のかずかずを心に生き生きさせました．*ああ，神様，*と彼は言い，そのさいに両腕を広げました：*これこそは私のラプンツェルの，まさに彼女の声だ！*

やはり彼の思ったとおりでした．それというのも，彼女のいるひとけのないさびしい地まで彼がじょじょに歩んできていたからでした．彼女は小屋の前に座り，身の不幸な恋物語についてのなにかを歌っていました．天使のように美しい二人の子が彼女から遠くない草地で遊んでいて，少しばかり離れて来たとき，公子が木の下に横になっているのを目にし，公子のところにかけよってきました．二人の子は彼をまっすぐに見るやいなや彼の首に抱きつき，くり返し，くり返し叫びました：*あなたはわたしたちのお父さんだ！*彼らは母親を呼びましたが，そのときにとても大きな声で叫んだので，彼女が駆け足で来て，なんであろうか，と分からないほどでした．それというのも，これまでこのひとけのないさびしい地で彼女を邪魔するものは何もなかったからです．

それにしても愛する夫を突然目の前にしたとき，彼女はどんなに驚き，そして喜んだことでしょう！それは言葉で表すことが決してできません．彼女は大きく叫び，彼を抱擁し，彼女の満足はとても大きかったので，そのとき泣かないではいられませんでした．そして，なんと不思議であったことか！彼女の涙のいくつかが公子の両目に落ちるやいなや，公子の両目がふたたび戻ってきて，彼はかつてのようにはっきりまた見ることができるようになり，この幸運をラプンツェルの愛に感謝せねばならず，そのために彼は彼女をふたたび愛したのですが，その彼の愛の強さはそれまで決してなかったほどでありました．

美しい公子，美しい公女，そして彼らの二人のかわいい子がとても互いに喜び合い，みな喜びのあまり涙せざるをえないほどであったのは，ほんとうにほろりとさせられる光景でした．

その日は喜びのうちに過ぎてゆきましたが，しかし日が暮れてきたとき，このささやかな家族みながいくぶんお腹がすいてきました．公子がかごに手を入れ，ビスケットにありつこうと思いましたが，しかしなんてことでしょう！それは石でした．彼はこの不思議なことに驚き，深くため息をつきました．幼子二人は泣きました，それというのも彼らのビスケットも石になったのですから．あわれな母親は子供たちにせめて二，三滴の水くらいを与えたいと思いましたが，その水もクリスタルになりました．

それはなんというおそろしい夜であったことでしょう！いつまでもこの夜が続くのではないだろうか，と彼らは思いました．夜が明けるやいなや，

彼らは起き上がり，茎などを探したいと思いましたが，しかし，ああ，何と，何とつらいことか！それら茎などがヘビやミミズになったのです．彼らは鳥を捕まえたいと思いましたが，ことのほかかわいいものでさえもがワタリガラスに，ヤツガシラやハイタカになってしまいました．*もう我々はおしまいだ，愛するラプンツェルよ，*と彼は言いました：*我々がたがいにふたたび出会わせられることになったのは，けっきょくお互いが飢え死にしてゆくのを目にするためだけにすぎなかった！—それなら死にましょう，*と彼女は大きな声で言い，彼を抱きしめました：*そして私たちの敵に私たちのことをうらやましがらせてやりましょう，私たちがかくも安らかに永眠したことを．*あわれな子供二人は彼らの膝にすわってとてもぐったりしていたので，泣くことさえもはやできませんでした．もしこの光景をじっと見たとするなら，石にさえ哀れみの気持ちを起こさせることができたでしょう．しかしほんとうにいまや助けがやって来ました．あの妖精が心動かされ，美しいラプンツェルに対するかつての愛情が妖精に戻ってきたのです．妖精がすばらしい車に乗って空中を走ってきて，彼らみなを受け入れ，きらびやかなクッションに坐らせ，公子の父親が宮廷をとりしきっている城につれてゆきました．城のだれもが喜びのあまり“われを忘れ”たのは，失われたと思われてすでにとても久しいので，王様が第二の公子を授かろうとふたたび結婚しようと思っていたのに，かの美しい公子が戻ってきたからです．結婚するのを王様がそこでやめたのは必要がなくなったからです．彼の息子がいまや二倍にも幸せであったのは，かつて不幸であったからで，ラプンツェルをそれだけいっそう倍にも愛し，彼女も彼を倍にも愛したのは，かつて互いに姿を消してしまったことがあったからでした．ここで彼らの話は終わりです．

（訳出したテキストは，
PERSINETTE in *Rapunzel, Tradition eines europäischen Märchenstoffes in Dichtung und Kunst,* Brüder Grimm-Museum Kassel 1993, S.17-27.）